

18世紀ローブの試着用衣装に用いるパニエの制作と着付けの工夫：学館連携事業における試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉田, 慶子, 浜田, 久仁雄, 中村, 圭美 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4422

18 世紀ローブの試着用衣装に用いるパニエの制作と着付けの工夫 —学館連携事業における試み—

学芸学部 化粧ファッション学科 杉田 慶子
 神戸ファッション美術館 浜田久仁雄
 神戸ファッション美術館 中村 圭美

要旨：本研究は、神戸ファッション美術館所蔵の 18 世紀フランスの宮廷衣装であるローブ・ア・ラ・フランセーズの試着用衣装の着装を体験することで歴史衣装に対する理解を深めることを目的とし、試着用衣装の下に装着する 1 人で着脱可能なパニエの制作方法とローブの着付けの工夫について検討した。パニエの作図はペチコートとローブの横広がりシルエットを表現できるように寸法を検討した。縫製方法は、ペチコートとローブの重みを考慮して、二重仕立てとし、その間にポリエチレン製のメッシュ素材とボーンを挿入し、ウエストにはゴムベルトを用いた。着付け時の工夫としてウエスト部分に筒状の紐通し布を 2 本取り付け、その中通した丸紐を左右のペチコートのスリット部分から引っ張ることで体形に合わせた調整ができるようにした。その結果、一人での着脱が可能となり、当時の女性の着装と被服の構成との関わりについての理解を深める効果が期待できる。

キーワード：18 世紀ローブ、パニエの制作、着付けの工夫、試着、学館連携

1. はじめに

大阪樟蔭女子大学（以下：本学）では、2004 年から神戸ファッション美術館と学館連携事業を行っている。この事業は、神戸ファッション美術館の貴重な美術館の収蔵品や施設を教育研究に活かすと同時に、その研究成果を美術館に還元する目的で、復元品制作をはじめ資料のデータ化や分析、展示作業等を試みている。

本研究は、神戸ファッション美術館所蔵の 18 世紀フランスの宮廷衣装であるローブ・ア・ラ・フランセーズ（収蔵品番号 2-FR-03-F1-9-1・2）の着装を体験することで歴史衣装に対する理解を深めることを目的とする。図像資料や実物資料の表側からの観察では明らかにできない衣装の構造や縫製方法、体型との関わりなどについて、実際に触れて着装するという体験を通して理解を深めることができるよう、一人で着脱可能なパニエの制作方法とローブの着付けの工夫について検討した。

2. 学館連携事業の一環としての復元制作

神戸ファッション美術館（以下：美術館）は、六甲アイランドに 1997 年開館したファッションをテーマにした公立では日本初の美術館である。展示室では貴重な収蔵品を活用し「衣」を様々な視点と切り口で紹

介するユニークな展示を行っている。特徴的な展示方法の一つとして、本学が制作し美術館に納めた復元品は、収蔵品である原品と共に並べて展示するだけでなく、実際に触れる機会も提供し、原品の表面上からは解明できない衣服の裏側、例えば構造や縫製方法などを知る手掛かりの一つとして活用されている。また、原品の縮小パターンと縫製解説書も併せて作成している。

本学がこれまで美術館に収めた復元品等の一例を以下に示す。

- ・クリノリンのデイドレス（1860 年代）の復元品と 1/5 パターン、解説書
- ・ローブ・ヴォラント（1730 年頃）の復元品と 1/5 パターン、解説書
- ・シュミーズドレス（1800 年頃）の復元品と 1/5 パターン、解説書
- ・ポール・ボワレのオペラ・コート（1920 年代）の復元品と 1/4 パターン、解説書
- ・ジャンヌ・ランバンのローブ・ド・スティール（1926 年～1927 年）の復元品と 1/4 パターン、解説書
- ・マドレーヌ・ヴィオネのデイドレス（1932 年）の復元品と 1/4 パターン、解説書

- ・ロブ・ア・ラ・フランセーズ（18世紀）の試着用ロブ、ペチコート、コルセット、パニエ

3. パニエの制作

3.1 パニエのデザイン

図1は美術館所蔵の18世紀フランスの宮廷衣装ロブ・ア・ラ・フランセーズ（収蔵品番号2-FR-03-F1-9-1・2）である。試着用ロブとペチコートはこの原品を基に本学被服学科（2017年度より『化粧ファッション学科』に名称変更）の学生が教員指導のもと、原品パターンを1.08倍した試着用パターンで制作した¹⁾。コルセットはロブの試着用パターンを使用し、ロブの前身頃とストマッカーのシルエットを美しく整えることを目的に、一人で着脱可能なパターンと縫製方法で制作した²⁾。



図1 神戸ファッション美術館所蔵のロブ・ア・ラ・フランセーズ

本稿で検討したパニエは、試着用ロブとペチコートの下に着用するためのものである。図1からも明らかであるが、ロブ・ア・ラ・フランセーズは両横に張り出したシルエットが特徴である。この構築的なシルエットは、ロブとペチコートを装着するだけでは表現できず、パニエの装着が不可欠である。

歴史衣装の復元に関する先行研究では、中西らによると「コルセット、パニエなどのファウンデーションのレプリカ製作や絹織物を用いた製作を試みる必要がある³⁾、太田は19世紀のパニエを必要としないドレスの復元であるが「下着であるコルセットについても製作が必要であるため今後の課題としたい⁴⁾と記載している。伊豆原、倉らの研究では縫製技術について考察しているがコルセットやパニエについては言及し

ていない⁵⁾⁶⁾。また、野口らはロブ・ア・ラ・フランセーズの復元的制作を行っているがパニエについては「トワルで風船を膨らませたような形を作り張りのあるチュールを中に入れて、作り直した⁷⁾とされ、材料や縫製方法、掲載されている写真から当時のパニエの形状を再現したものではないことが窺える。

パニエに関する研究としては、フリルのギャザー量と膨らみの関わりや⁸⁾、パニエとスカート形状の再現性と有効性についての研究がみられる⁹⁾。また、榎本、富田の研究では^{10)~12)}、タイトスカートを土台にフリル状のチュールによってボリュームを、そしてファスナーを取り付けることで丈が調節できるシステムパニエを考案している。さらに応用型としてクリノリンやバスルススタイルパニエを研究し、着回しの幅の広がり提案しているが、ロブ・ア・ラ・フランセーズのためのパニエとして制作されたものではない。

現在ウェディングドレスなどのボリュームのあるシルエットに使用されるパニエは、フープ状のワイヤーやハードチュールにタックやギャザーを入れた状態のものをパニエの土台となるスカートに取り付けることでボリュームやシルエットを調節している。そのため18世紀とは縫製方法や素材も異なる。ロブ・ア・ラ・フランセーズのペチコートの下に着装されたパニエの形状については、「スカートが広がりを増すにつれてパニエは左右二つの部分に分かれていった。革命までフランス宮廷ではこの形態が着用された¹³⁾とされている。そのため、本研究で制作したパニエは、左右に分かれたデザインとした¹⁴⁾。

3.2 パニエの作図

パニエの作図を図2に示す。底部分の曲線の寸法と

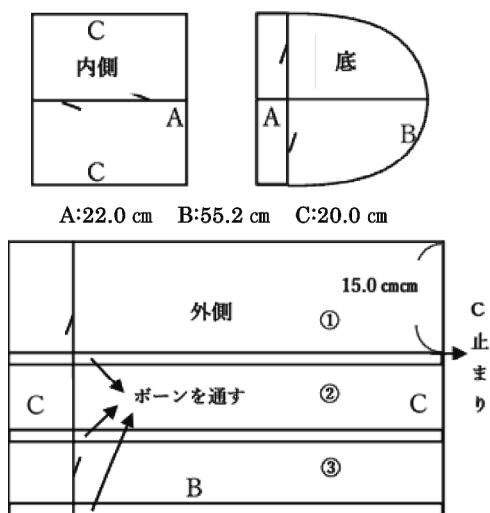


図2 パニエの作図

膨らみ具合は、ペチコートがたるみやひきつれが生じず綺麗に広がり、裾が水平に保たれるように作図した。

Cの内側は、腰部側面から大腿部側面に沿うよう長さを底面から20.0cmとし、側面の外側の長さはCの寸法に15cmを加えた35.0cmとした。Aの寸法はパニエの前後幅である。当時のスカートは現在の所謂プリンセスラインと呼ばれる前後にもボリュームを出した釣鐘状のシルエットではなく、左右の張りが特徴的である。試着用衣装に合わせるために、何度も作図を描き直し、試作を重ね、曲線部分のB寸法55.2cmの膨らみのバランスとも検討した結果、A寸法の前後幅は22.0cmが最も適当であると判断した。ボーンを通すための幅は2.0cmとした。

3.3 パニエの材料および縫製

パニエの材料および縫製は、多数の人々が着用することを想定し、以下の点について留意した。

- 身体や衣服を傷つけず、安全であること
- 一人で着脱が容易にできること
- 丈夫であること
- ウエストのサイズ調整が可能であること
- 軽量であること
- ロープとペチコートの重みを支え、シルエットを保つことができること

(材料)

- タフタ (ポリエステル 100%)
- ハマナカ製ファインネット
- 1.5cm 幅プラスチック製ライクボーン
- 3.0cm 幅ゴム
- 3.0cm 幅ベルト芯
- 11mm 幅ふちどりバイアステープ
- 3.0cm 幅Zカン
- 60番ポリエステル糸

(縫製方法)

強度と型崩れを防ぎ、そして縫い代が見えないようにするためにタフタの表布で外側、内側、底すべてをリバーシブル仕立てとし、その間にボーンとハマナカ製のファインネットを挟み込んだ。

ファインネットはポリエチレン100%で出来ており、約0.7cm四方のメッシュ状で軽量、柔軟性もあり、カバンや帽子などのネット編みの土台に使用されている。そのため、折れて破損する、先端が生地を突き抜けるといった心配がないため、パニエの補強として使用することにした。

図3はパニエの作図と裁断した片側分のファインネッ

トである。外側に使用するファインネットは底から2段(図2の外側②③)に使用し、一番上はギャザーを入れて縫い縮めるため、ファインネットは使用しない。

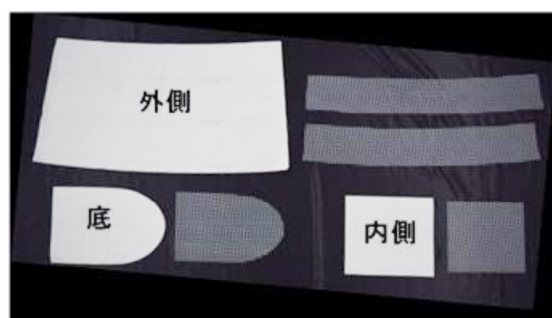


図3 パターンと片側分のファインネットの裁断

(縫製手順)

1. 外側布地2枚を外表にし、上部・中心・下部の三箇所にボーンを通すための隙間を2cm幅でミシン縫いし、ファインネットと作図の曲線部分と同寸の55.2cmのボーンを挿入する。
2. ファインネットを2枚の布地の間に挟み込みながら内側と底部分を縫い付け、筒状にする。
3. 上部は25.0cmに縫い縮め、バイアステープで縫い代を包み、楕円状の形を保つために両端を幅3cm、長さ7cmのベルト芯で繋ぎ合わせた。図4は上部を縫い縮める前の状態である。ファインネットとボーンにより、形状が保たれている。
4. 左右の片側を幅3cm、25cmのゴムテープで繋ぎ合わせる。もう片方は中央に着脱用のZカンとZカンの通し口を縫い付ける。図5はゴムテープにZカンと通し口を縫った状態である。



図4 上部を縫い縮める前の状態

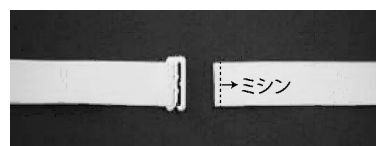


図5 ゴムテープにZカン(左)とZカンの通し口(右)を縫った状態

図6は上から見たパニエの片側で、上部を25cmに縮め、バイアステープで包み、ベルト芯、ゴムテープを取り付けた状態を示す。リバーシブル仕立てにすることで、上からも縫い代が見えず、見た目も美しく仕上げる事ができた。



図6 上から見たパニエ片側出来上がり

出来上がったパニエを人台に着せ付け、正面と側面から撮影したところを図7に示す。側面からは前後のボリュームが抑えられていることが確認できる。

パニエの上にペチコートを着装した状態を図8に示す。ペチコートの重みを支え、裾のラインも水平になり、ペチコートの横広がりシルエットを美しく表現することができた。



図7 パニエ正面と側面



図8 パニエの上にペチコートを着装

4. 着付けの工夫

4.1 背当て布

当時のローブは裏側の背中部分に背当て布が取り付けられている。図9は原品の背当て布の状態を示す。背当て布は左右に分かれ、左右5本ずつ合計10本の紐が縫い付けられており、紐の結び方で左右の背当て布の間隔が調節可能である。背当て布は現代の裏地と同様、補強や表布への汚れを防止することができるが、調節可能な紐が取り付けられていることから、背当て布の一番の目的は、より体型にフィットさせることではないかと推察される。



図9 原品ローブの背当て

当時のローブは着用者の体型に合わせて制作され、背当ての紐はより着用者の体型にフィットさせるために使用し、他者の助けを得ながら着用したと思われる。

それに対し、試着用ローブは一人で着脱可能にすることが目的である。試着用ローブの背当て布の状態を図10に示す。



図10 試着用ローブの背当て

図9の原品と同様に左右に分かれた背当てを取り付けたが、原品との違いとして、試着用は着脱を繰り返すうちにほどけることを避けるため、両端に取り付けた布ループにクロス状に紐を通した。しかし、着用者

がこの紐を調節して自身の体型に合わせるためには何度も試着を繰り返しながら調節しなければならず、また、体型によってはこの紐だけで着用者にフィットさせることは困難である。そのため、着用後に体型にフィットさせる着付けの工夫を検討した。

4.2 調整紐の制作

一人で着用後に体型にフィットさせるための工夫として背当ての紐を使用しない、新たな調節紐の制作と取り付け方法を検討した。ローブ・ア・ラ・フランセーズはフィットしたウエストから両横に張り出したシルエットが特徴である。そこで、着付けの工夫として、巾着口を引き締める方法を応用し、新たな調節紐をウエスト部分に取り付けることにした。

まず、出来上がり幅が3cm、長さ46cmの筒状の紐通し布を2本制作し、ローブ裏面の後ろウエスト部分に取り付けた。その中に直径0.5cm、長さ120cmの丸紐を2本通した。巾着口を応用した紐通し布と紐を通した状態のイラストとローブの後ろウエスト部分に取り付けた状態を図11、12に示す。

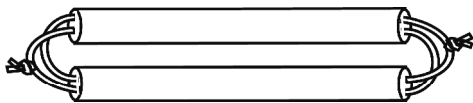


図11 紐通し布に紐を通した状態のイラスト

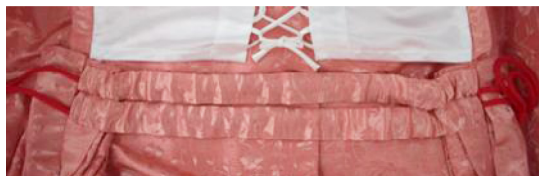


図12 試着用ローブの後ろウエスト位置に紐通し布を取り付け、その中に紐を通した状態

図13は調整紐を左右のペチコートのスリット部分から引き出し、自身で引き締めながら体型にフィットさせている状態を示す。



図13 左右のスリットから調整紐を引き締めているところ

図14は調整紐を引き締める前、図15は調整紐を引き締めた状態を示す。引き締める前はウエストから腰に掛けてたるみが生じ、体型に沿っていないが、引き締め後はウエストにフィットし、両サイドの腰の張りを美しく整えることができた。

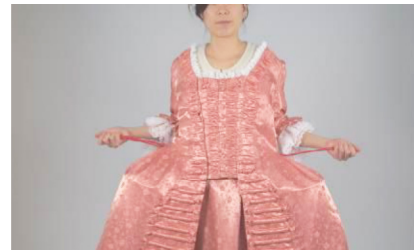


図14 調整紐を引き締める前

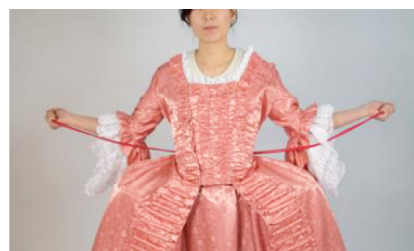


図15 調整紐を左右から引き締めたところ

引き締めた左右の紐は、そのままスリットからローブ内側に収納すると着付けが完成する。着付けが完成した状態を図16に示す。



図16 着付け完成（前・横・後ろ）

5. 衣装の重量

原品と試着用衣装の重量を計測した一覧を表1に示す。原品のコルセット、パニエは美術館には当時の所蔵品がなく不明であるが、ローブが1770g、ペチコートが850gで合計2550gである。原品はシルクのダマスク織で、中に詰め物をして膨らませたキャンディ状の装飾、袖口には円形の重りも取り付けられている。これらにコルセットとパニエなどの下着を身に付けるとさらに重量が増すが、当時のパニエはローブとペチコートの重量を支え、美しい佇まいや着こなし、立ち居振る舞いのためには、不可欠である。

試着用ローブとペチコートはポリエステルジャンタンで制作し、ローブが1150g、ペチコートが550gと原品と比較するとかなり軽量である。さらにコルセット127g、パニエ350gを加えた総重量は2177gであり、原品のローブとペチコートの重量より軽い。

表1 衣装重量

	原品 (g)	試着用 (g)
ローブ	1700	1150
ペチコート	850	550
コルセット	—	127
パニエ	—	350
合計	2550	2177

一人で着脱することを考慮した場合、軽量であることも大切な要素である。コートやジャケットを始め、上衣は肩で衣服の重量を支えているものが多く、スカートやズボンにはウエストラインで支えている。また、ブライダルドレスによく見られる前後肩縫い合わせのないベアトップ型の身頃と、ボリュームのあるスカートをウエストではぎ合わせたワンピース型のドレスでは、ドレスの重量はすべて胸囲から胴囲にかけて支える必要があり、身体に掛かる衣服圧と重量は着用者にとってかなりの負担である。

一方、ローブ・ア・ラ・フランセーズの着装では、横広りのパニエの着用により、両肩やウエストラインに掛かる荷重が少なからず分散されていたのではないと思われる。

6. 試着用衣装の活用状況

制作した衣装は、美術館1階エントランスに2018年春から不定期ではあるが試着体験コーナーを設け、希望者は自由に試着できる機会を提供している。カー

テンで仕切った試着用ブースの横にはフォトスポットとして背景も用意している。

試着用ブースには試着の順序を示したパネルを用意しており、多くの来場者が自由に体験されているが大層好評とのことである。

美術館以外では本学の授業や行事に活用し、学生を始め多くの人々に体験の機会を設けることで、歴史衣装に対する理解や興味・関心を深めることに役立っている。

今のところ大掛かりな補修が必要なほどの傷みや劣化は見られないが、パニエについては、ゴムの伸縮性が徐々に弱くなってきている。ゴムを取り換えるためにはミシンで縫い付けた部分をほどいて新しいゴムを縫い付ける必要がある。簡単な作業はあるが、縫製知識のない人でも簡単に取り換えるためには、ゴムを直接縫い付けるのではなく、例えばベルト布に仕立てたものをパニエ上部に取り付け、その中にゴムを通すようにするなど、容易に取り換える工夫が必要である。

また、試着を希望する子どもが少なくないとのこと、子どもが試着する際はクリップなどでサイズ調整を行っているとのことである。子どもが無理なく着用できるサイズで制作するためには中心となる対象年齢や、サイズが小さくなる分、縫製面ではどこまで原品に忠実に再現するかなど検討事項は多い。しかし、子どもが歴史衣装への興味・関心を持つことは、衣服教育の一環のみならず、これから衣生活を営んでいく上でも有益である。そのため、クリップなどでサイズ調整するのではなく、新たに子ども用サイズで制作する意義は大きいと考える。

7. おわりに

メッシュ素材とボーンの使用で、ペチコートとその上に装着するローブの重みに耐え、シルエットを美しく保つことができた。また、ペチコートに取り付けたベルト芯でペチコートの前後の広がり安定し、ゴムテープとZカンによって一人で着脱可能となった。原品のローブは背当て部分に取り付けられた紐で着用者の体形に合うようにサイズ調整をしていたと推察されるが、試着用ローブはウエスト部分に調節紐を取り付け、着用者がその紐を引き締めながら、自身のウエストにフィットした横広りのシルエットを再現することが可能となった。

これまで美術館では原品の展示だけでなく、復元品に触れる機会や縮小パターンと縫製解説書を通し、画像資料や表面の観察だけで解明できない衣服の裏側

を知る手がかりの一つを提供してきている。

今回はローブ・ア・ラ・フランセーズの装いに不可欠なパニエを着用し、当時の着装に近い試着を一人で体験できるという新たな試みを行った。この試みにより、当時の衣装の着装や構造、縫製方法を知るだけでなく、着用者がパニエの効果、着心地、シルエット、動作によるローブの変化などを体感し、着装と被服の構成・縫製、体型との関わりなどについて、より理解を深める機会を提供することができたと考える。

また、今後は子どもサイズの衣装一式について作図や縫製方法を検討し、制作に取り組んでいきたい。

註

- 1) 水野、杉田、中村、浜田、後藤、片山、西尾、繁：学館連携事業における歴史衣装の活用法－18世紀ローブの試着用デザインのプロ案を通して－日本家政学会大69回大会研究発表要旨集 p. 85 (2017年5月27、28日：奈良女子大学)
- 2) 杉田、水野、中村、浜田、後藤、片山、繁、川瀬：学館連携事業における歴史衣装の活用法－18世紀ローブの試着に用いる下着の制作－日本繊維製品消費科学会2017年年次大会・研究発表要旨集 p. 150 (2017年6月24、25日：京都女子大学)
- 3) 中西・永野・三友・今村・小堀・能澤、18世紀女性衣装の構造：トワルドゥ・ジュイ製のローブのレプリカ製作を通して、東京家政大学博物館紀要10：115-128 (2005)
- 4) 太田茜、歴史実物資料の復元制作指導における課題、倉敷市立短期大学研究紀要：117-121 (2015)
- 5) 伊豆原月絵、18世紀のフランス宮廷衣装の復元研究－縫製技術について－、大阪樟蔭女子大学研究紀要1：49-54 (2011)
- 6) 倉みゆき・能澤慧子、西洋服飾実物資料のレプリカ製作－解体と模写－、服飾文化学会誌作品編5：1-10 (2012)
- 7) 野口ひろみ・浅野正子、18世紀フランス宮廷夫人の美しい姿勢、山脇学園短期大学紀要46：28-51 (2008)
- 8) 榎本春榮、パニエについての一考察・フリルのギャザー量と形状との関わりについて、和洋女子大学紀要家政系編43：69-83 (2003)
- 9) 榎本春榮、縮尺モデルにおけるパニエに支持されたスカート形状の再現性と有効性、繊維学会誌66巻5号：113-119 (2010)
- 10) 富田弘美、システムパニエー基本型－、服飾文化学会誌作品編7：37-41 (2014)
- 11) 富田弘美、システムパニエークリノリンへの応用型－、服飾文化学会誌作品編9：11-14 (2016)
- 12) 富田弘美、システムパニエーバスルへの応用型－、服飾文化学会誌作品編9：15-20 (2016)
- 13) 京都服飾文化研究財団、華麗な革命・ロココと新古典の衣装展：p. 47、141 (1989)
- 14) Janet Arnold、Patterns of Fashion1、Drama-book：p. 74 (1995)

謝辞

本研究に際し、作図・縫製においてご協力を賜りました元大阪樟蔭女子大学学芸学部化粧ファッション学科 Technical Assistant 後藤弘美氏、大阪樟蔭女子大学学芸学部化粧ファッション学科 Technical Assistant 片山郁子氏に感謝の意を表します。

本稿は、日本繊維製品消費科学会2018年年次大会(2018年6月23、24日：金城学院大学)において発表した内容を基に、さらに検討と考察を加えたものである。

**The Making of a Pannier, Used in The 18th Century for Robe Fitting,
and a New Idea on How to Put on a Robe:
An Attempt by University–Museum Cooperation**

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies

Keiko SUGITA

Kobe Fashion Museum

Kunio HAMADA

Tamami NAKAMURA

ABSTRACT

The purpose of this study is to deepen the understanding of historical costumes by re-experiencing wearing the “Robe à la française”, the 18th century French court costume of the Kobe Fashion Museum. Therefore, this paper examined how to make a pannier that one person can put on and take off, and a new idea on how to wear a robe. The silhouettes of the petticoat and the widened robe were investigated with the aim of drawing the pattern for the pannier. For the sewing method, considering the weight of the petticoat and robe, a polyethylene mesh material and bone were sandwiched between the fabrics. A rubber belt was used for the waist. Two cylindrical cloths were attached to the waist as a new idea for fitting. By pulling the round string passed through the belt from the slit parts of the left and right sides of the petticoat, it was possible to adjust the robe according to the body shape. As a result, it was possible to put on the robe and take off without the help of another person. Further, through this study, a deeper understanding of the relationship between women’s clothing and clothing construction during the 18th century can be expected.

Keywords: 18th century robe, making of a pannier, idea on how to put on, fitting, university–museum cooperation